

談話分析による課題解決型討論の促進/阻害要因

Effective/inhibition factors of problem solving discussion by discourse analysis

朝日 龍之介^{*1}, 中平 勝子^{*1}, 岡本 満喜子^{*1}
Ryunosuke ASAH^{*1}, Katsuko T. NAKAHIRA^{*1}, Makiko OKAMOTO^{*1}
^{*1} 長岡技術科学大学,
^{*1} Nagaoka University of Technology,
Email: s143369@stn.nagaokaut.ac.jp

あらまし：本稿では、輸送事業者の管理職と現場の運転者の群別に、課題解決策の立案をテーマとしてグループ討議を行い、原因の特定から対策立案に至る討議内容の分析を行う。分析は、実験参加者の発言を意見や相槌等の種類に応じて分類し、その個数や相互関係の検討を行い、両群の対策立案に至る対話の特徴を抽出する。これを通じ両群に共通するあるいは独自の、討議を促進/阻害する要因を明らかにし、活発な討議の実現を目指す。

キーワード：談話分析, 安全教育, アクティブラーニング

1. はじめに

高齢化社会が急速に進行している我が国では、免許返納に伴う移動手段として、今後ますます大型バスによる輸送ニーズが高まると考えられる。しかし、大型バスの事故発生件数は年々上昇しており⁽¹⁾、バス事業者の事故防止策を充実させる必要がある。対策には、運転支援システムの導入等のハードウェア面からの事故防止が考えられるが、運転に最も大きな影響を及ぼすのはバスを運転する人間である。

そこで、本研究では運転者に対する安全教育に着目した。バス事業者の中で行われている安全教育の1つに集団討議がある。これは、2人以上の対話を通じて課題の理解や解決を図る方法であり、小集団による討議の代表的なものとして、バズ学習やブレイン・ストーミングなどがあげられる。これらの学習はアクティブラーニングの手法の一つであり、集団討議はアクティブラーニングの場と位置づけることが出来る。アクティブラーニングとは、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称のことであり、学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会能力的、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図るものと定義されている⁽²⁾。またグループ討議を活用したアクティブラーニングクラスと旧来の講義形式のクラスを比較した結果、学生の授業満足度、知識の活用的側面に焦点を当てた論述問題の成績向上につながる事が示されている⁽³⁾。意見の交換を通じ、知識や認識の共有を行う事により、課題理解度の向上や記憶の定着に期待できる。すなわち、アクティブラーニングの場である集団討議の活性化は安全教育の効果向上に不可欠であると考えられる。

一方、集団討議は、運転者だけでなく管理職の中でも行われる。管理職は運転者の安全指導を行う立場であるため、同時に管理職間の討議活性化も必要

である。

仮に、同じ安全運転というテーマであったとしても、運転者は自ら日常的に行う業務、管理職は運転者を指導し実行させる立場であるため、発言の内容は異なると考えられる。しかし、この点を明らかにした研究は見当たらない。

そこで、本研究では安全運転という特定のテーマに関する両者の討議内容の分析を通じ、両群に共通する、あるいは独自の討議を促進/阻害する要因の抽出を目的とし、これを通じて、両群での討議の一層の活性化を目指す。

2. 実験手順

2.1 実験対象者

協力事業者所属で、バス運転業務に従事する運転者と、運転者に対する安全教育を行う管理職を対象とした。

2.2 談話の方法

実験対象者である運転者、管理職を群別に3人から6人のグループを構成。本研究では、運転者と管理職の各1グループを分析対象とした。

実験は、同じ営業所の運転者グループと管理職グループを2組ずつ配置し(図1)、全てのグループが同時進行する形式で行った。はじめに、実験者が自己紹介の上実験目的を伝え、本実験中の討議内容が業務上の評価対象となることはない旨を説明した。その上で、実験の進め方、討議テーマを説明し、最初の課題を開始した。各グループは課題ごとに討論を行い、その結果をシートに記入する。この時、各自が記入するか、書記を決めて議論するかは各グループの裁量に任せるものとした。各課題の討議時間は8分とし、8分経過毎に、司会者が次の課題に移るよう促した。全討議時間は、説明を含めて約40分である。

討議は「交差点進行時に安全確認のため必要と定められている運転動作」をテーマに、次の4つの課題について行った。(1)この運転動作が適切に行われない理由の検討、(2)(1)であげた、それぞれの理由の更なる検討、(3)(1)であげた、それぞれの理由の現実的な解決策として会社に提案したいこと。(4)(1)であげた、それぞれの理由の解決策として現実的に自身に取り組めること。

実験者が司会進行を行い、討議テーマの説明、話題項目の切り替え以外では討議に関与しないものとした。談話はカメラ、ICレコーダで録画、録音し実験後文字に書き起こした。

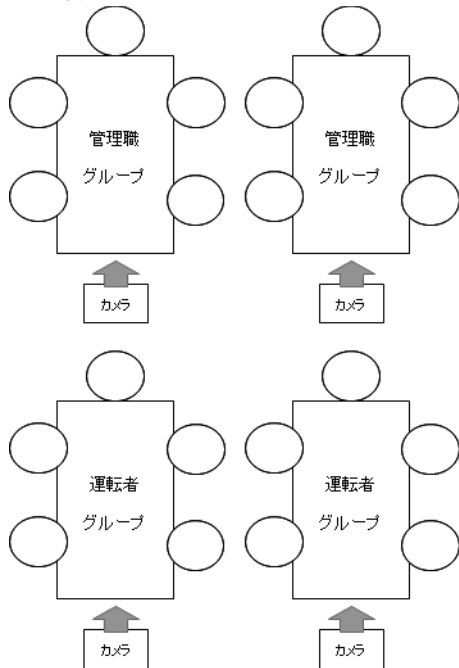


図 1 実験配置図イメージ

3. 分析方法

3.1 発言の分類方法

自然な話し言葉による対話では、複数の文が1度の発言で発話されるため、本稿では学校教育での学びの促進を目的とする研究⁽⁴⁾を参考に、実験者と実験対象者、または実験対象者間での話者交代、同一話者に関して発話中の3秒以上の間、句点により区切られる一文を基本としつつ、発話機能や内容が明らかに異なる部分は1文中でも区切って分析単位とした。

また、分析単位となる発話行動の分類に関してはSWBD-DAMSL⁽⁵⁾、MRDA⁽⁶⁾で提唱されているDialog Act (発話の種類を示したタグ)をもとに、分類項目を作成した(表1)。

3.2 談話分析

上記の法則で区切られた発言に、表1の項目を割り当てる。この時、割り当てが困難なものは2人の実験者が一致するまで協議し、分類する。

こうして各項目に分類された発言行動の個数や、

連続した発言をn個組み合わせ、その時間遷移をみることで、談話進行の特徴を分析し、討議を促進/阻害する要因を特定する。

表 1 分類項目と内容

項目	内容
発言-意見	自分の主観的状态や意見を述べる
発言-意見以外	客観的な事実や、自身の経験などを述べる
相槌	聞き手が話し手から送られた情報を共有した事を伝える表現
質問	討議中の話題に関する事に問いかける
回答	質問に対するはい、いいえ等の回答
反応	復唱を含む、話題に対する反射的な発声
独り言	用紙記入時等に表出する発声

4. 予測される結果

管理職グループは普段から指導する側の立場からか、集団討議を意見交換の場である事を理解しており、意見の後に、同意や共感の意味の相槌が続くことが多く、課題から横道にそれた発言が殆どなされず、運転者グループに比べ、円滑な討議がなされていた事から、討議全体を通しての、意見の後に相槌と続く組み合わせ、意見以外の発言の数や割合という観点からの分析が有益である。また、運転者グループは独り言や復唱が連続する事が多く討議が停滞している印象を受けた、この事から、独り言・復唱の連続は討議の阻害要因であると考えられる。

参考文献

- (1) 国土交通省自動車局: “自動車運送事業用自動車事故統計年報(平成26年)”, <http://www.mlit.go.jp/jidosha/anzhen/subcontents/data/statistics57.pdf> (参照2017-2-13)
- (2) 文部科学相中央教育審議会: “新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)用語集(平成24年8月28日)”, http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf (参照2017-2-13)
- (3) 杉山成, 辻義人: “アクティブラーニングの学習効果に関する検証”, 小樽商科大学人文研究, Vol.127, pp61-74 (2014)
- (4) 川口史恵, 秋山恵子: “道徳授業における発話カテゴリーの作成”, 学校教育研究, Vol.23, pp.17-26 (2011)
- (5) Jurafsky, A. Shriberg, L. and Biasca, D.: “Switchboard SWBD-DAMSL Shallow-Discourse-Function Annotation Coders Manual, Draft 13”, <https://web.stanford.edu/~jurafsky/ws97/manual.august1.html> (参照2017-2-12) (1997)
- (6) Dillon, R. Bhagat, S. and Carvey, H. et al.: “Meeting Recorder Project: Dialog Act Labeling Guide”, ICSI Technical Report TR-04-002 (2014)